

## ◎ジョン万次郎の沖縄上陸の軌跡

前号(9号)と重なる内容もありますが、今号ではジョン万次郎ら3名が沖縄に上陸してから故郷・中浜に帰るまでの流れをざっと振り返ってみたいと思います。地元・沖縄ではコロナ禍前は「ジョン万次郎宿道探索ウォーキング」を定期的に行き、万次郎らが辿った約172年前の大度海岸から翁長までの約12キロの道のりのウォーキングを開催している。

### (1) 万次郎ら四名が沖縄に上陸(大度浜海岸)

嘉永四年(1851)旧暦1月3日、現在の沖縄県糸満市大度浜海岸(当時は小渡浜)にアドベンチャー号(ボート)で上陸。サンゴ礁帯の浅瀬上にボートを着けたが、そこに切れ目があり、離岸流が発生していた。地域住民のアドバイスにより、それより東側の浜にボートを着けた。ここは南北に開けた白いビーチがあり、陸に向かう波の力でボートを浜に着けることが容易であった。その浜の北側にジョン万上陸之碑が建てられている。

### (2) 間切番所での状況確認→那覇へ→急遽に那覇立ち入り禁止

万次郎ら3名は、地域住民の知らせを受けた間切番所役人が浜に来て、万次郎ら3名を間切番所まで連れて行った。そこで漂流のいきさつや荷物検査を受け、那覇まで連行されることになった。小禄間切(現在の那覇市小禄一帯)まで行ったときに、急遽、那覇に立ち入ることを禁じられた。当時、那覇に英国人宣教師として赴任していたベッテルハイムと万次郎とを接触させないようにするための措置であった。ベッテルハイムは万次郎と親しいハワイ在住のデーモン牧師と、交友関係があった。

### (3) 豊見城間切翁長村・高安家を宿舎に取り調べ

那覇に入る手前で引き返らされた万次郎らは、豊見城間切翁長村(現在の豊見城市字翁長)の高安家を宿舎とし、ここで取り調べを受けることになった。高安家は万次郎らに母屋を明け渡し、家族は母屋の脇に茅葺の小屋を臨時に建てて生活した。万次郎らの食事を作る料理人を雇い、客人の待遇で生活することができた。外出も厳しい束縛がなく、度々万次郎は外出し、地域住民と接したと伝えられる。写真は、万次郎が外出したときに飛び越えたという高安家に今も残る「ヒンブン(屏風、魔除け)」。



↑正面の長方形の構造物がヒンブン

↑ヒンブンの前に立つ(田村=身長 175cm)

#### (4) 薩摩→長崎→高知城下→故郷・中浜へ

約半年間の琉球滞在後、薩摩(鹿児島県)に移送されてその後、長崎奉行所、高知城下での取り調べを経て、11年ぶりに土佐国幡多郡中浜村に帰省し、やっと母の顔を見ることができた。



↑中浜の航空写真(昭和50年代)



↑足摺岬に所在する万次郎像

## ◎「第10回戦争遺跡保存四国ネットワークシンポジウム in 土佐清水」

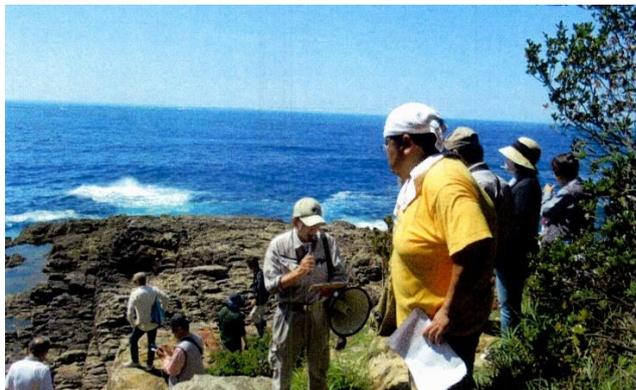
### 盛会のうちに終了!

6月3~4日(土~日)に土佐清水市立中央公民館と足摺岬~松尾地区にかけての戦争遺跡を中心にして開催された標記のシンポジウムが盛会のうちに終了しました。

本シンポジウムでは、土佐清水市教育委員会と土佐清水市郷土史同好会が後援しており、3日の中央公民館で開催されたシンポジウム開会では、岡崎哲也教育長が開催の祝辞を述べた。また、その晩、レセプションも開かれ、土佐清水市郷土史同好会・武藤清会長があいさつを述べた。このシンポジウムは、「平和資料館・草の家」副館長・出原恵三が事務局であり、出原氏には『新土佐清水市史』『戦争遺跡』の章を執筆いただいた。その調査の成果発表の意味もあり、大変意義深いシンポジウムとなった。なお、当日は高知新聞清水支局・小笠原支局長の取材もあり、新聞紙上にも取り上げていただいた。



↑土佐清水市中央公民館3階多目的ホール



↑松尾女城鼻に所在する監視哨